

くどう せんらいひつ やまさんけい す ふすまえ
工藤仙来筆「お山参詣図襖絵」

弘前市指定有形文化財 (平成15年3月28日指定)
 よんめんいつしき しほんちゃくしよく
 四面一式 紙本着色 各縦178.8cm 横111.5cm

お山参詣 (岩木山の登拝行事、国指定重要無形民俗文化財) は、津軽一円から御幣を携えて岩木山に向い、旧暦八月一日の日の出を拝み、五穀豊穰と家内安全を祈願するために集団登拝する民俗信仰行事です。

この行事がいつ頃から始まったのかは定かではありませんが、一説には鎌倉時代初期といわれています。現在の形式が定着したのは江戸時代中期ごろと考えられますが、当時、旧暦八月一日の登拝は藩主のみで、一般は二日以降に登拝することが定められ、一般の人々が一日の御来迎を拝むことができるようになるのは明治に入ってからでした。

お山参詣には唱え言があり、集落から岩木山をめざす道中や、登山中も唱えます。漢字での表記は、時代による変化や地域による違いなどいくつかの説が存在するようですが、岩木山神社によると

「懺悔懺悔 六根懺悔 御山八大 金剛童者 一々礼拝 南無婦命頂礼」

であるそうです。「神の前に身を清め、今年の収穫を捧げにきました。御宮殿に登拝者一人々々が全霊を傾けて感謝します。」という意味になり、山岳信仰すなわち修験道の影響を強く受けていることがわかります。

さて、岩木山信仰の代表格と言われているお山参詣ですが、現在では観光的な側面が強くなり、儀式としては簡略化されることも多くなりました。御幣は鉋がらを削って作ったものから、ビニールテープに変化し、白装束は揃いの法被に変わりました。登拝自体も岩木山

スカイラインの開通により、九合目から登ることもでき、誰でも気軽に参加できるようになりました。

祭りの形式は時代とともに変化してきたわけですが、ここで、この襖絵に描かれた明治期の様子を見てみましょう。

旧暦八月一日 (現在の九月初旬頃) の行事であるはずなのに、岩木山が神格化されているためでしょうか、雪景色で描かれています。門前には土産屋や芝居小屋が見えていますし、普段着の老若男女、警官や軍人らしき人の姿も見え、明らかに登拝を目的としていない人が多数描かれていることから、当時すでに観光という性質を持っていたことがうかがえます。

次に、登拝者の服装ですが、寛政年間 (1789~1803) に著されたとされる「輿民図彙」には「多クハ紅染ノ木綿ナリ」とあります。この襖絵にも赤っぽい衣装を着ている人が数人描かれていますが、白装束や青色の法被のようなものを着ている人の方が多く見受けられます。

岩木山神社の様子はどうか。境内は今と変わらぬ姿で描かれていますが、よく見ると現在では通常立ち入ることのできない神社本殿まで参拝者が入っています。

美術品としてはもちろんですが、部分部分が非常に細かく描きこまれ、明治期のお山参詣という行事の様子と、人々の風俗を伝える民俗学的価値も高い作品です。展示された際にはぜひ人々の様子をじっくりとご覧ください。

(棟方 隆仁)



全体



登拝者



岩木山神社



百沢街道